著者が語る
社会調査テキスト

杉野 勇　お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系 教授
轟 亮　金沢大学人間社会研究域人間科学系 教授

『入門社会調査法 ――2ステップで基礎から学ぶ』

法律文化社
初版1刷　2010年4月
第2版1刷 2013年4月
第3版1刷 2017年3月

いきさつは忘れたが, Robert M. Grovesらの Survey Methodology (2004, 訳,2011) に触れたのは2007年であった。その密度と分量だけでなく, 方法論的検討が,テキストレベルでもこれほどまでに深くなされているのかと圧倒された。これまで自分たちが接してきた社会調査法の授業や教科書とのあまりにも大きな違いに愕然としたと言ってもいい。そうした研究や知見が, 自分たちも含めた日本の社会学徒にわずかにしか共有されておらず, 自分たちの社会調査法の学習がきわめてドメスティックな (ガラパゴス的な？) ことも反省させられた。

書籍のマーケット規模や学生の支出行動を考えれば, 日本で (というよりは非英語圏で) そのようなテキストが初学者向けに流通することはほとんど期待できないだろうし, 自分たちの力量からしても目標にすることすら不可能であるが, 海外の方法論的研究の知見をできる限り初学者にも, あるいは授業担当者にも触れやすいものにしていきたいという思いは我々のテキストの一つの方針となっている。初版刊行後の2011年からは, 隔年開催の欧州調査研究学会(ESRA)大会にも毎回参加し, 諸外国での社会調査における方法論的研究の水準を学んで第2版以降の改訂に積極的に活かしている。

内容の検討会はかなりの時間と回数をかけて行った。執筆者の間で, 難易度や対象読者をどう設定するかについて真剣な論争が展開されたのは一度や二度ではない。調査方法論や統計的分析についての考え方についてもしばしば激しい意見対立を生じ,「一緒に共同研究をしていくのが難しいような立場の相違」であるとの発言もあった。しかし別の執筆者は, 意見が異なるのは当然であり, むしろそうした論争によって理解が進んだと肯定的に受け止めていたし, 結果的にこの議論は第3版改訂で活かされることになった。

難易度設定の問題の一部は, 基礎と発展という2ステップ構成にしたことによってある程度解決された。この2ステップ構成で, 学生に読んで学んでほしい基礎知識と, どちらかと言えば担当教員向けの情報提供や研究結果の紹介の両方を掲載することができた。社会調査士資格の正式発足とともに多くの大学で社会調査法カリキュラムが拡充・整備されたことと思われるが, それらの授業科目の中には, 若手教員や必ずしも調査方法論を専門としない教員が担当しているものも多いだろう。学生が学習するだけでなく, そうした担当教員たちが読んでも何かしら新しく学べ, 考えることのできるテキストにするというのも目標の一つであった。

教員・研究者への情報提供という点では, 索引や文献リスト作成にもかなりの手間をかけた。文献リストには, 担当教員・研究者にとって有益だと考える文献をなるべく豊富に載せることを意識したし, 海外での知見や議論との接続をよくするために索引ではできるかぎり英語表現を調べて併記することにした。そのおかげで外国人教員から,「海外の調査法専門用語に対応する日本語がわかって便利だ」と言われたこともあった。

執筆のために海外の研究動向も参照する中で,

調査法研究もまた変化の激しい研究領域であることを強く感じるようになった。考えてみれば,「社会調査の困難」(この表現もやや使われ過ぎてきた印象もあるが) の深刻化と同時に調査方法 (論) も変容していくのは自然であるが, 国内では「社会調査法とは既にでき上がった知識体系である」と思っている社会学者は少なくないのかもしれない (編者の一人は実際に身近な社会学者からそのように言われ,「社会調査法は研究テーマにはならない」と言われたことがある)。我々はそうしたイメージは間違ったものであると考え, できる限り新しい知見や研究動向を盛り込もうと考えた。第2版, 第3版と,3,4年間隔で改訂しているのはかなり早いペースではないかと思うが, これは社会調査方法論もまた常に変化している研究領域であると考えていることにもよる。そして改訂の度にまた激しい検討会が繰り返され, 本文の内容面で大きな変更を行っている。初版ではいちおう章ごとの分担執筆の形になっているが, その後の改訂では, 編者からの介入が強かったり, 章間で関連する内容の調整や移動を行ったりした結果, 必ずしも章単位での明確な分担執筆とは言えなくなってきている。

これまで本書の構想・執筆や改訂は, 科学研究費による共同研究とほぼ並走して行ってきた。本書の執筆陣と科研費メンバーが一致している訳ではないが, 轟と杉野以外にも複数の執筆者が研究分担者となって調査方法論的研究を行いつつ, その成果の一部を積極的に改訂内容に活かしてきた[1)]。海外の知識を吸収しつつ, 自分たちでも調査方法論的な研究を進めたいという思いでこれまで継続してきている。きちんと系統的な学習をしていない無知な素人がつたない模倣をしようとしているものだなと思いつつ, 自分たちの経験をテキストに反映したいと考えたのである。

海外の知見の紹介に力を入れることに対しては, 国内の方法論的研究を十分に参照できていないことと相まって「輸入学問に戻っているだけでは」という批判もあるだろう。自らも十分に理解しないまま性急に紹介しようとしたところもある。海外の知見の紹介以外でも, 通説的な論述からの意図的な逸脱もしばしばあり, よく読むとかなり癖のあるテキストになっている部分もある。人によってはそれを間違いと見なしたり眉を顰めたりしているだろうと思いつつも, 自分たちが理解した内容を率直に書くことにしている。

気付いたら10年以上もテキスト作成や調査法科研を続けてきており, そのためか社会調査や調査方法論についてのシンポジウムや特集企画, あるいはアドバイザー活動などに携わる機会も増えてきた。社会調査方法論の専門家であるなどという自己認識は決して持ってはいないが, 特に, 従来型の社会調査の実施の困難や費用の上昇と回収率の低下, ウェブモニター調査の増加, 社会のICT化の加速とビッグデータやAIの隆盛といった昨今の状況を考えると, 自分でももうしばらく見聞を広めたいと思うし, これまでの社会調査という営みの行く末を見届けたいという気持ちもある。なので, 機会がある限りは, もう暫くこのテキストを発展させていきたいと考えている。ただしそこで大きく立ちはだかるのが, 学生からは決して安いとは思われない価格と, 書きたい内容に対して十分とは言えないページ数という制約であるが。

編者二人体制となったのはたまたまのいきさつであった。藤子不二雄という二人組の漫画家と似ているかどうかは知らないが, 編者の一方は楽観的で調整役的, 他方は悲観的で視野が狭い。前者は常に次の改訂のことを考え, 後者は売れずに絶版になると予想してきた。それでかえってバランスが取れていたのか, なんとかこれまで続けてくることができ, 現在は第4版の準備にかかっているところである。予想外の社会的混乱で順調に作業が進められるのかどうか不安はあるが,2021年3月には第4版の刊行にこぎつけたいと考えている。

注

1) 2007-09年度・轟亮・基盤研究 (B) 18330104,
2010-12年度・轟亮・基盤研究 (B) 22330148,
2013-15年度・杉野勇・基盤研究 (B) 25285147,
2016-18年度・轟亮・基盤研究 (B) 16H03689,
2018-21年度・杉野勇・基盤研究 (A) 18H03649